

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689
研究種目：奨励研究
研究期間：2019
課題番号：19H00015
研究課題名：古代東アジアにおける対外関係と地域支配の連関についての研究

研究代表者
柿沼 亮介 (KAKINUMA, Ryosuke)
早稲田大学高等学院・教諭

交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：540,000 円

研究成果の概要：

本研究は、古代国家による地域支配の方法が対外関係とどのように連関しているかという点について、境界領域となる地域や人々の支配のあり方から明らかにすることを目的とするものである。古代中国の日本や新羅からの外交使節の来着地においては、公的な対応だけでなく民間のネットワークによる支援が行われたが、両者は必ずしも組織的な補完関係にあったわけではなかったことや、渡来系氏族を移配しての建郡には対外関係の影響がみられるが、背景として従来から指摘されてきた日本の小中華意識のあり方は、時期によって質的な差異があることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在唐新羅人についての研究は、そのネットワークを日本の遣唐使がどのように利用して唐を旅したかという視点から行われるものが多かった。本研究では、在唐新羅人集落の現地調査を行い、当時の海岸線やその地域の国制上の中心地との位置関係を検証することにより、在唐新羅人を「移民」支配という視点から分析し、さらには日本における渡来系氏族の支配のあり方と比較する点に学術的意義がある。また社会的には、領土問題や移民といった現代的な課題を相対し得るような古代の国家や国際関係への視座を提供を目指す点に意義がある。

研究分野：日本古代史、対外関係史、東アジア交流史、歴史教育

キーワード：在唐新羅人、渡来系氏族、遣唐使、入境経路、東アジア、対外関係、地域支配

1. 研究の目的

日本と朝鮮諸国との交流について、中等教育においては日本史の教科書でごくわずかに触れられているに過ぎず、対外関係は中国との関係を中心に描かれることが多い。しかし、遣唐使は最も安定的に派遣されていた奈良時代ですら 20 年に 1 度程度の派遣であったのに対して、新羅・高句麗・渤海とはより頻繁に交流が行われていた。また、地方支配についても国・郡・里制についての一般的な説明や、蝦夷・隼人に対する征討事業についての説明はあるものの、支配の実態について理解できる材料は提供されていない。

そこで本研究では、古代の外交使節の入境経路上における接遇のあり方から国家と地域の関係を検討したり、「移民」の国家的支配に注目することで、古代国家による地域支配の方法が対外関係とどのように連関しているかという視点から古代の東アジア交流史の分析を行う。これによって、対外関係について国家間関係に留まらない理解を促し、生徒により豊かな歴史像を提供することを目的とする。この視点は、領土問題や移民、地域統合などの現代的な課題と、歴史教育において扱う内容を結びつける意義もあると考えられる。

2. 研究成果

(1) 内容と成果

外交使節の入境経路における現地での接遇や、外国からの移住民や渡来系氏族の国家による支配のあり方について検討を行った。

入境経路での接遇については、日本の遣唐使の中国における活動に注目した。円仁の『入唐求法巡礼行記』には、日本の遣唐使の中国入境後の現地での接遇や、中国における外交使節の活動を支えた在唐新羅人のネットワークについての記述が多くみられる。そこで遣唐使の動向や円仁の滞在地について現地調査を行い、地域支配との関係について検討した。調査では、円仁ら承和の遣唐使一行が中国において最初に上陸した如東から揚州まで、運河沿いに遡った。如東において円仁らが滞在した国清寺は、発掘が進む中で出土遺物から位置が確定しており、当時の海岸線との位置関係などを確認した。如皋市や泰州市では、円仁が滞在した寺院と同じ名前の寺院が運河沿いに現存していることを確認した。揚州では、城門や開元寺遺跡の現状の確認や行程の比定を行った。さらに南京において、国清寺遺跡の調査などを行った南京大学の賀雲翱氏から発掘の状況について聞き取りを行った。

移住民の支配については、中国の連雲港における在唐新羅人集落と日本の武蔵国高麗郡・新羅郡に注目した。中国では、在唐新羅人集落が所在した宿城村跡や円仁の上陸地と考えられる高公島において調査を行い、唐に移住した新羅系の人々が果たした国際通交上の役割について検討した。日本では、武蔵国の高麗郡や新羅郡などの渡来系の人々を中心とする郡の建郡の背景を比較し、渡来系氏族への国家による支配のあり方を検討した。

こうした調査・研究の結果、以下のようなことが明らかになった。1) 古代の中国における日本や新羅からの外交使節の来着地においては、公的な対応だけでなく民間のネットワークによる支援が行われたが、両者は必ずしも組織的な補完関係にあったわけではない。2) 日本において渡来系氏族を移配して行われた建郡には対外関係の影響がみられるが、背景として従来から指摘されてきた小中華意識については時期による質的な差異がある。

さらに以上を踏まえ、境界領域となる地域や人々を素材とした授業プログラムの開発を行った。

(2) 「境界史」の視点

本研究を実施する中で、入境経路や「移民」について検討するために「境界史」の視点を導入する意義を認識するに至った。対馬・壱岐や五島列島、南島、東北は古代日本の境界とされたが、境界認識は時期によっても変化したと考えられる。境界地域は対外交流において大きな役割を果たし、さらに特殊な地域支配を受けたが、境界として認識された時期を考慮することで本研究はより深まると考え、「境界史」の視点からの検討を行った。

(3) 今後の展望

本研究において、在唐新羅人が日本や新羅の遣唐使の活動において果たした役割と中国の国家的な接遇との関係について、連雲港の事例を中心に検討したが、他の在唐新羅人集住地における事例についてさらに検討することで国家による地域支配の限界について明らかにしたい。また、日本の境界地域や渡来系の人々の集住地における国家的支配の様相についても、さらに対象地域を広げて検討していきたい。

3. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- ・ 柿沼亮介 「渡来系氏族を素材とした歴史教育の可能性」(『早稲田教育評論』34-1、2020) p. p. 91-107、査読有

〔学会発表〕(計 2 件)

- ・ 柿沼亮介 「8 世紀における日本の対外関係と渡来系氏族政策」(朝鮮史学会、2019 年 9 月 21 日)
- ・ 柿沼亮介 「武蔵国新羅郡建郡の歴史的背景」(第 7 回高麗郡建郡歴史シンポジウム、2019 年 12 月 15 日)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。